編集・発行：©倉敷芸術科学大学図書館（〒712-8505 岡山県倉敷市連島町西之浦2640 TEL.086-440-1181 FAX.086-440-1182）
編集・発行責任者：
館長 山岡萬謙
（国際教養学部教授）
編集者：
館員 井上弘行
館報は図書館ホームページでも読めます。
http://www.kusa.ac.jp/lib/MAIN.HTML

題号の由来

孔子と弟子たちの言行を収録した『論語』の「子曰、『学而不思則罔。思而不学則殆』」（「先生が言われた、『学んでも考えなければ、はっきり理解できない。考えても学ばなければ、確かなものとならない』」の意）による。

読みは日本語の音読みとした。

初代学長谷口澄夫先生の筆による。

祝 国際教養学部 起業学科誕生

起業学科の諸君へ

国際教養学部　起業学科主任
教授　川勝　恒郎

諸君は記念すべきミレニアムの年に本学の国際教養学部起業学科へ入学されました。本当におめでとうございます。心から諸君を歓迎します。

諸君の中には、高校と大学の雰囲気の違いや、授業方法や先生方の諸君への接し方の違いに、ややとまどっている方も多いと思います。私は大学とは皆さんの「知的好奇心」をより高め、またより深める場所であり、大学が皆さんの「知的好奇心」を少しでも満足させることができれば、その大学は、大学としての使命の大半を果たしたと言い得ると考えております。

本大学の起業学科は、将来自分で何か新しいビジネスを起こそうとか、いろいろな企業に入って、他の人々と協力しながら、大いに自分の才能を伸ばしていこう・あるいは両親の家業を引き継ぎながら、なにか自分のノウハウや技能でその事業を拡大発展させようという志を持った学生諸君の集まった学科です。

そのために起業学科では、諸君の志の達成に役立つような基礎科目や、また具体的実践に役立つ専攻科目を用意しています。しかし、大切なことは、まず諸君が旺盛な「知的好奇心」を持つことであり、この好奇心を満足させてくれるのが、諸先生の講義であり、またいくつかの図書であります。諸君には、特に書物に親しんでほしいと思います。

最後に諸君の参考になると思う二、三の本を挙げておきます。これらの大半は、大学の図書館にあります。

参考図書

『ベンチャーズ　インフラ：攻めの「セイフティネット」をつくる』
秋山喜久他編著（NTT出版）

『ベンチャー創造の理論と戦略：起業機会探索から資金調達までの実践的方法論』
ジェフリー・A・ティモンズ著
千本倖生・金井信次訳

『創業力の条件』
加藤敏春著
（以上ダイヤモンド社）

読書のすすめ

慶 修士課程 大学院完成年度

大学院
美術専攻主任
教授　下田　義寛

まるで整理がつかない、必要なものも探し出せないほど、山積みの、もの生活のなかで変色し赤茶けた本。

『日本の美術―その伝統と現代』河北倫明著
（昭和三十三年社会思想社：カバーのなくなった復刻版）

『日本の美術―その伝統と現代』河北倫明著
（昭和四十三年ぺりかん社、前述単行本の改訂版を復刊したもので現在も重版を続けている）

小編ながらこの2冊は、いつもそこにある。この著作が出て後の40余年、美術の形には一見、めまぐるしい変化があったように見えても、ここで説かれていることの真髄を読み取れば、一貫して変わらぬものは何かを理解出来よう。日本美術の妙味が再認識され、世界的な理解が得られようとしている今も、伝統と現代の課題に真正面から対峙し、新たな展開を模索する者を励まし力づけてくれる本である。

大学院
工芸専攻主任
教授　生谷　吉男

本学における工芸制作は、伝統的な技法を基礎から学び、現代に生きる学生の感性と創意工夫によって新しい工芸創作者を育成することを主軸としている。

特に工業社会よりの文献から得られる情報は手作りを標榜するわれわれにとっても貴重なものであり、内外文献は本学図書館に揃っており、常に気を配ってほしい。

文献情報は関連したものだけを読むだけでなく、広く要約やヘッドラインを通読することで技術の変化を読み取ることができる。こうした最新情報を常に持ち続けて工芸制作に打ち込む中で、いろいろの創作ヒントが得られる。

図書館には多くの美術書が所蔵されている。優れた美術品や工芸作品に触れることで思考力を高め、美的感性を錬磨向上させる。

大学院生諸君には、情報の宝庫であり、美術集積の場である図書館へ、たびたび足をはこんでほしい。

大学院
計算機科学専攻主任
教授　村井　眞一

本に興味が無くなったわけではないものの、このところ殆んど読むという習慣を無くしてしまった人間に、推薦図書を挙げよ、とはなんとも意地の悪い企画である。読まないまでもせめて本を買い込み積ん読を決め込む癖は辛うじて残ってはいるものの、興味の対象がどうしても年齢を反映しており、その中の一冊を大学院生諸君への推薦図書とするには具合が悪い。

困り果てた上での世迷い言ながら、先ず大学院生であるからには、英文論文を読む英語力を身につけて卒業して欲しい。それには、修士研究関連分野の英文論文を精力的に読破していただきたい。

その上であえて推薦するならば、大野晋著『日本語練習帳』（岩波新書）を挙げておきたい。「思う」と「考える」の違いや、「は」と「が」の違いなど、日頃気にしながらそのままになっていた事柄が、なるほどと得心が行くようになる。一文を短くなど、これも分かっていながら実行が難しい文章作法も、興味深い具体例で分からせてくれる。

『セレンディピティー／思いがけない発見・発明のドラマ』

R・M・ロバーツ著
安藤喬志訳
（化学同人）

大学院
機能物質化学専攻主任
教授　萬代　忠勝

「瓢箪から駒」の言葉通り、研究の場でも思いがけない偶然が大発見、大発明に繋がることがある。それが「セレンディピティー」であり、辞書によれば「偶然に幸運な予想外の発見をする才能」と定義されている。本書は、天然痘ワクチン、ダイナマイト、合成繊維、抗生物質等、人類に大きく貢献した偶然による発明・発見のドラマを紹介している。

これらは確かに偶然に端を発するが、決して単なる幸運の産物ではない。高名な生化学者、パスツールはセレンディピティーについて、「観察の場で幸運を生かすか否かは待ち受ける心構え次第である」と表現している。明確な問題意識を持った科学者の鋭い洞察力がなければせっかくの幸運も生かされない。その意味で、研究生活の第一歩を踏み出した大学院生諸君に一読してもらいたい一冊である。

『生半可な学者』

柴田元幸著
（白水社）

大学院　人間文化専攻主任
教授　植木　利彦

著者は東京大学教養学部の先生です。P・オースタ、S・ミルハウザー、S・エリック、S・ダイベックといった、私にはあまり馴染みのない現代アメリカ作家の小説を沢山翻訳しています。最近では、同僚の佐藤良明氏と共著で『佐藤君と柴田君』というエッセイも出版しています。この本の中では、弥次さん喜多さんの『東海道中膝栗毛』ではないけれど、お2人の大学生活や日常生活が愉快に語られています。ご本人はこの本を読むと頭も良くなると宣伝しているが、これはちょっと眉唾ものでしょう。

前述の『生半可な学者』は、『テレビコスモ』という雑誌の中に「時事英語」というタイトルで連載したものやその他の雑誌などに書いたものを纏めた本です。例によって、時事英語とは、関係のないエッセイも沢山あるが、さすがに東大の先生、諸々の事象を見る視点がなかなかユニークでもあるし、ユーモアにも富んでいます。勉強疲れの息抜きに一度読んでみてはいかがでしょうか？

『奪われし未来』

長尾　力訳
（翔泳社）

大学院　人間文化専攻
教授　塩飽　直紀

―その著者講演会を聞いて―

巣を作らないワシ、孵化しないワニやカモメの卵、子を産まないミンク、アザラシやイルカの大量死、そしてヒトの精子の数の激減。地球を覆う「生命の衰退」の背後にはなにがあるのか。現代文明に対するこの深刻な問いかけに対して、内分泌攪乱化学物質（環境ホルモン）となる合成化学物質の蔓延が、主たる要因であるとして、一九九六年、アメリカの3人の科学者によって出版され、ベストセラーとなったのが見出しの本である。原題は『OUR STOLEN FUTER』で訳本は97年9月に出ている。

去る6月3日（土）著者の一人、ダイアン・ダマノスキさんの講演を聴く機会があった。その要旨は、人間の生活を豊かで快適かつ便利なものとしてきた現代文明そのものを見つめ直し、何がほんとに必要なものなのかを見極めることが大切であり、また、環境に配慮を欠く経済活動についても考え直さねばならないということであった。

私自身は、こうした指摘は、結局、我々一人一人がグリーン・コンシューマーになる大切さを説いていると解釈した。

図書館の役割とインターネット

―学生諸君へ―

産業科学技術学部
教授　長瀬　洋一

かつては学生にとって図書館は、試験のときのまたとない駆け込み寺であった。一夜漬けで試験場に駆け込むことは、今も昔も変わりのない平均的な風景であるが、その前に試験に出そうなテーマについて、気の利いたキャッチフレーズを図書館で数冊の類書の中から大急ぎで探し出す。そうすると得点が必ずランクアップしたものであった。

―図書館は多数の類似書がそろっている―

〝気の利いたキャッチフレーズ〟を今様に言い換えると、〝かっこいいセリフ〟とでもいえようか。誰々のスタイルが〝かっこいい〟とか、テレビタレントのギャグが〝かっこいい〟とか、ともかく現在は〝かっこいい〟なる言葉が氾濫している。ところで、かっこよくあり続けるには、〝かっこいい〟情報をいち早くキャッチし、またこれを加工する必要があろう。

一足飛びに江戸時代の昔に戻るが、当時、封建の抑圧に対抗する庶民の唯一の手段が口コミ情報であった。ただし口コミ情報は無数にあって、そのうちの大部分が誤認や舌足らずの情報、いわゆる〝噂話し〟の類で、尾ひれが付いて止めどもなく誤解が広がってゆくことになる。その中にあってごく一部の情報が貴重な庶民の智恵を伝えた。例えば黒船来航のときに幕府の狼狽を皮肉った落書き、

〝太洋の世を揺るがす上喜撰（蒸気船）たった四盃（叟）で夜も眠らず〟

等がそれであろう。

このように大昔から情報は無数にあったものであり、この内から良質な情報とそうでないものとを選別することによって、情報の海の中を溺れずに泳いでゆけることになる。

良質な情報もまた無数にある。

これらを分野ごとに整理し後代に伝えてゆくのが図書館の一つの役目である。

―図書館は良質情報の宝庫である―

さて、インターネット時代になって情報の質と量が爆発的に増大するようになった。また宇宙衛星を介して世界中の画像情報が居ながらにして得られるようになった。湾岸戦争のときのように、戦争の情景をありのままに、on timeで見たのは人類にとって初めての経験であった。いずれもコンピューターが劇的に進歩したおかげである。

問題はインターネットには私的情報、広告、中途半端または消化不十分な情報、誤解を招きかねない情報等もごちゃごちゃに詰まっていることである。テレビにすら中途半端または消化不十分な情報が多い。せっかく、多量の情報が得られるようになったのであるから、これらが整理、再編集され、いつでも得たい良質な情報を簡単に得られるようになるならば、知識普及にどれだけ役立つものか、その効用は計り知れない。

その役目はかつては図書館にあったのであるが、今や一図書館では捌ききれない。全国ネットの情報処理、再編集機構の成立を願うものである。

（おことわり：本稿は第5号掲載の予定でした。紙幅の都合で今号となりました。）

わが青春この一書

『代数的整数論』

研究室には7段書架が7列ある。それでもスペースが足らずゼミ室や実験室へも侵入するほど、本好きである。家族からは『場所ばかりとって、図書館で借りてくれば…』と言われることもしばしば。でも返却日が気になり、気がせき、落ち着かない。この館報に書くにはふさわしくないかもしれないけれども、自分で購入してゆっくり味わいたい。何年か経ち、読み直すことも多い。あの時、買っておいて良かったなと思うのである。本との出会いを求めてつい本屋へ足が向く。58年に『少年サンデー』、翌年に『少年マガジン』が相次いで発刊した漫画世代である。必然的に、週刊少年漫画雑誌の影響は大だった。まだ漫画が社会から認知されていない時代であった。しかしある篤志家の自宅の一部を図書室として開放し、そこには漫画の本がたくさんあって自由に読むことができた。最も印象に残ったのが手塚治虫『0（ゼロ）マン』。少年サンデーに連載後の単行本を繰り返し読みふけった。『鉄腕アトム』はテレビアニメの印象が強く、読んだ記憶は薄い。

産業科学技術学部
教授　船倉　武夫

中学生の頃、赤塚不二夫の全盛期で、『おそ松くん』、『天才バカボン』に夢中であった。中学校図書室に漫画がなく図書委員をしていたとき、担当の先生と交渉して、漫画本も蔵書としておくことにした事を思い出す。最も多大な影響を与えた漫画は、白土三平『忍者武芸帖』。高校受験のために通った講習会で、大学生アルバイト講師が、授業の合間に、『ガロ』という今まで見たこともない月刊漫画雑誌を紹介してくれた。白土三平『カムイ伝』で知的大人の気分を味わい、もはや少年漫画雑誌へ戻ることはなかった。

自分で最初に買った活字本は、海野十三『地球盗難』。古本屋で題名と値段の安さに引かれて、確か五円で買った覚えがある。SF傾向の小説を好むきっかけであった。純文芸作品も濫読したが、今すぐ思い出すのは、安部公房『壁―S・カルマ氏の犯罪』『第四間氷期』、夏目漱石『夢十夜』、三島由紀夫『美しい星』、光瀬龍『百億の昼と千億の夜』などである。

大学へ進学したとき、騒然とした社会への関心とともに、まじめに授業に出ることは余りなかった。ただし数学の専門書を読み進める、いわゆる自主ゼミだけはいかなる用事よりも優先して参加した。そこで、大学で数学を教えることになる高木貞治『代数的整数論』と出会った。論理的に追うこと自体が難しい。仮に論理的に分かっても、本当に分かった気がしない。奇妙な果実を味わい続ける羽目になってしまった。でも途中で投げ出すのは絶対したくなかった。数年掛けて前半を読了。より現代数学的な取り扱いの弥永昌吉編『数論』を読み進むことになった。しかし肌が合わない。卒業研究なので仕方なく最後まで付き合ったが、擦り切れた本以外、何も残らなかった。大学院で再び古典的な高木貞治『代数的整数論』の後半へ回帰した。人生を決めた一冊である。

高木は「類対論の成果は…簡単明瞭であるに反して、その証明法は…努力にも拘らず、今なお迂余曲折を極め、人をして倦厭の情を起こさしめるものがある」と、弥永は「数論には、古くからの問題でありながら、今日も未解決のものが少なくない。その意味で、多くの神秘を蔵する分野であるが、他方でそこに展開される類対論のような、世にも美しい理論がある」と、挑発的な序文によって整数論へ誘なわれた。

近隣図書館訪問記

図書館という名の「知の宝庫」

倉敷市立児島図書館
レポーター　教養学部3年　佐々木　恒平

「知の宝庫」。図書館と聞いてまず思ったのがこの言葉だ。小学校の頃よく図書館へ通い、伝記ばかり読んでいた。最近は勉強でたまに行く程度で、足を運んでいるとは言えない。さらに学校以外の図書館となると、本当に久しぶりだ。

近隣図書館訪問記ということで、児島図書館（S48年設立）を訪れることになった。芸科大から南東方向に伸びる児島半島の先にある。倉敷市が擁する4館の一つである。前庭を過ぎて玄関を入ると、すぐにブロンズ像に出会う。手には「真理探究」とある。この言葉は、読書による知的探求への道を誘うに十分な響きを持ち、児島に住む人々7万人のまさに「知の宝庫」といえる雰囲気だった。

利用層はお年寄りから子供まで幅広い。約12万冊ある収蔵で、宗巴館長によれば「推理ものの文学小説が一番人気」ということである。他には健康管理、最近ブームのガーデニングなどの本も揃い、書架に並ぶ姿からも素早い対応が窺えた。また、ファッションを歴史に刻んだ町、児島らしくジーンズの本なども目立った。さらには海、船、瀬戸大橋という児島の地誌に関する本も多く見られ、地元への密着感がよく伝わってきた。

図書館では、車椅子の貸出にも応じる用意があると聞き、市民図書館だなと感心した。読書室は眺めもよく、いくつかの絵が壁に掛けられている。児島出身の画家・斉藤真一の筆による「追憶」は、その一点で各地の展示会にはよく指名がかかるほどである。

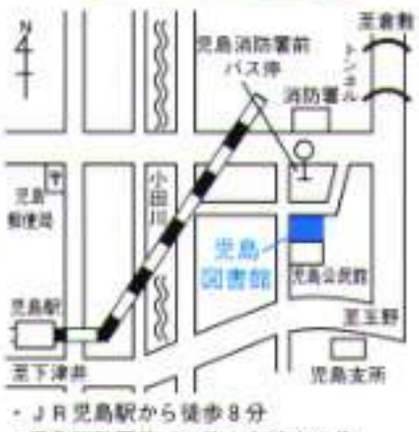
子供室の前ではミッフィーが「ようこそ、としょかんへ」と出迎え、ぬいぐるみも並び子供の目を楽しませている。その奥には幼児向きの広さをゆったりと確保して、見た目にも飽きさせない。人間は、幼少の頃の影響が濃く人生にうつるという。だから、子供たちには良い本を与えて、想像力を豊かにし、知識も伸ばすのが、感受性の育成に適している。公共図書館ならではの気配りである。大人の利用者とは本棚、壁を楯に、ある程度はにぎやかさの前に、「邪魔」という言葉をうち消しておりおもしろい。ちょうど今、日本全国からのメモリアル年賀状を展示しており、いろんなスタンプが楽しめる。こうしたバラエティさも人気を呼ぶ秘密と思われる。

ここの図書館の特徴として、公民館が同一敷地内にあるということである。そこで見たもの、聞いたもの、興味の湧いたものは、後で図書館にて調べる。これが叶うという大きな魅力が、そこに生まれる。また倉敷市立短期大学生や西隣にある児島看護高等専修学校生の若い感性に応える収集ともなっている。これも地域性の特質といえる。

このように児島図書館には、内海を中心に船や製塩、繊維に関する本が多かった。これは、児島の町がそうした歴史を継承して生きていることの証と思う。取材訪問を通して、自分の育った町をあまり知らない者には、この特徴ある環境に羨ましささえ感じた。

本が無ければ知の進化はない。人はその相半ばである。「知の宝庫」に児島図書館を見た思いである。

児島図書館案内



・JR児島駅から徒歩8分
・児島消防署前バス停から徒歩2分
〒711-0912　倉敷市児島小川町3672
TEL（086）472-4847

倉敷芸科大学生諸君！

直木賞作家　出久根達郎（でくねたつろう）

まず拾い読み

今日、あなたに思いがけぬ「良いこと」があった、とします。どんなことでもよい。試験の成績が予想以上だったとか、けんかしていた友と気持ちよく仲直りしたとか、とにかく嬉しかったことがあった。この感激を長くとどめておきたい、思い出に残したい、そのような気になったら、是非、本を一冊求めることをお勧めします。

物ではいけません、やはり本がよい。どんな本でも構いません。あなたが読んでみたく思った本を選んで下さい。買ったら、ざっと目を通します。熟読せよ、と命じられても、心がワクワクはずんでいますから、とても無理です。最初の数ページを適当に拾い読みして下さい。なに、どうせ頭に入りません。内容の理解はこの次でよろしい。

次にその本を、部屋の一番目につきやすい所に置きます。暇があったら、ページをめくるなり、読むなりして下さい。

喜びごとは、日がたつにつれ、淡い思い出と化します。ところが、当日に買った本を見ると、新鮮な気分で思い出します。この本は、大切に、保存して下さい。何十年かのち、昔の「良いこと」をありありと再現してくれるはずです。

本というものは不思議なものでして、思い出の記念に最適です。物だと年月がたちますと、さほどの感慨を起こさせてくれません。買ったら、その日に、少しでも読んでおくこと。これが大事です。この時読んだ文章は、案外に忘れないものです。

本は買うけど読まない、という人がおります。でも少しでも拾い読みしておくと、のちに必ず読みたくなるものです。ムダ買いで終らせないためにも、是非そうして下さい。最初から読み通そうと考えるから、面倒になって読みたくなくなるのです。初めは拾い読みでよし。そう決めると、楽です。

図書館 忙々日誌

1月▽4　2000年問題対応機械調整▽6　図書館開館▽11　講義開始▽12『陽のプロペラ・Ⅲ』芸術学部濱坂渉助教授作品展示▽13　雑誌製本2500冊予定▽26　第2回図書委員会開催、「図書委員会規程」「図書館寄贈受入規程」の一部改正について

2月▽15　放送大学図書館視察

3月▽9　起業学科開設により図書523冊、雑誌7種、視聴覚資料3点収蔵▽23　学位記授与式▽31　99年度末総蔵書図書数47901冊。館員山本和泉退職

4月▽1　館員近藤恒子、人事異動で就職指導課へ。桐山大輔就職指導課より図書館へ、藤高由佳アルバイトとして図書館へ▽5　入学宣誓式▽6　新入生オリエンテーション3学部別に実施▽21　備前東高等学校図書館見学、OPACによる資料検索等実体験▽27・28　中国・四国地区大学図書館協議会総会（鳥取）に、山岡館長、瀬良事務長出席

5月▽1　館報第5号各大学図書館等へ送付▽9　岡山県図書館協会入会▽10　冷暖房機器切替▽18　自己評価委員会、図書館「自己評価」見直し▽24　出久根先生館報用原稿依頼▽29　館内火災報知器自己点検▽30「読書のすすめ」等図書紹介文依頼

6月▽7　倉敷市立児島図書館取材訪問（山岡館長、井上課長、教養学部3年佐々木恒平君）▽22　天窓雨漏り修理▽26　自己評価委員会作業部会▽27　川勝恒郎・長瀬洋一両教授館報用写真撮影▽29　事務文書印刷プリンター新設▽30　船倉武夫教授館報用写真撮影

「図書寄贈者（個人）」

左記の方々から図書の寄贈を受けました。本年度前期分で館内掲示もさせていただきましたが、ここに改めて厚くお礼申し上げます。

新田和子　生谷吉男
佐藤恒夫　中島智
船倉武夫　藤井貞雄
小松原勇　西田小百合
瀬里廣明　青田吉弘
古田喜美子　村上哲英
古谷英一　山岡萬謙
山嵜宏暉

（右敬称・書名略、寄贈順、お名前のみにさせていただきました）

天牛愚見

☆…言語の正しさと美しさとを判断するのは、その言語が伝統や風土に根ざしているか否かによる。また、個人の感受性や思考性などの教養の有無にも起因する。たとえば、偶発的に発生することが多い流行語は、社会性が投影されているとはいえ、短期間のうちに普及し消滅していくのが普通である。これは流行語が伝統や風土という地盤に根ざしていないで、語感の新奇さと便利さとにもてはやされるにすぎないからである。また、電車の中や広場などで耳にする傍若無人な饒舌は、その人たちの人間性の欠陥を露呈しているとさえ感じられる。それでは、どうしたら言語の正しさや美しさが身につくのだろうか。それは、正しく美しい言葉で書かれた書物や会話の効用に俟つのが最もよい方法だ。

☆…読書には付加的な作業を、あまり強制しないほうがよい。いわゆる濫読がよい。しかし、正しく豊かな人格を形成するための読書は、精読でなければいけない。もちろん、感性を陶冶し知識を養う読書も例外ではない。とすれば、娯楽や趣味に関する読書は濫読で、学問や教養に関する読書は精読でというふうに、両者をうまく併用するほうがよい。

現在は映像文化の時代と言われている。テレビや漫画が隆盛で、いわゆる活字離れの傾向が見られ、文字文化の衰退が顕著である。思うに、人間の行動様式を決定するものは文化である。それをもっと限定していえば価値意識ともいえようか。人間はその枠内で生きようとする。一方、文化が発展すれば価値の多元化現象は進んでいく。そこで、私たちは共有しうる根底的な価値の発見と所有のために、読書をしなければならないのである。

☆…情報化社会に適応するための言語情報処理力を育てるための基礎の一つとして、読書力、読書習慣を身につけることは、今後ますます必要が高まる。図書館としての文化的使命の存在もそこにある。

文化は、もともと人間を幸福にするという目的に奉仕するものといえる。すべての学問は、そういう文化的営みである点に変わりがない。地域図書館が充実していて、多くの利用者が文化的営みに参加している現在、大学図書館の存在意義を、改めて考えなければならないのではなかろうか。